吉井勇全集

第五巻

番町書房

吉井勇全集　第五巻　戯曲
昭和三十八年十二月二十日発行
定價一、六〇〇圓

著者　吉井勇

發行者　東京都千代田區二番町二　大島秀一

發行所　東京都千代田區二番町二　番町書房
電話東京(三三二)六六五八
振替東京一五八四四
印刷　大日本印刷株式會社
製本　株式會社　昇榮社

落丁・亂丁はお取替えいたします。

© 1963 T. YOSHII　Prnted in Japan.

吉井勇全集　第五巻　戯曲

責任編集　解説　木俣　修

目　次

午後三時……二
浅草観音堂……二〇
夢介と僧と……四〇
河内屋与兵衛……四九
劇場入口の半時間……六二
嚢の女……七二
生霊……八六
小しんと焉馬……一二〇
髑髏舞……一三八
狂芸人……一五五
解脱……一九八
俳諧亭句楽の死……二一四
夜……二三五
焉馬と句楽……二七八
句楽と小しん……二九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夏の夜話……三一三
妹の家出……三三〇
蓮　月……三五〇
実　朝……四二四
憶　良……四三一
青眉抄……四三八
白鳥歌はず……四六〇
風神雷神……四八二
解　説……木俣　修……四八五

第五卷

戲曲

午後三時　一幕

人物

荒川五郎　捕鯨船の砲手
村田滝蔵　船長
高野朔郎　水夫長
ふゆ　五郎の娘
進　盲目なる五郎の子
其他水夫等出づ。

場所

北国の海辺の街。

時代

現今。

晩冬。曇りたる日の午後。
日本海に臨める港街の尽頭、波止場に近く立てる旅館の階下の室。船は概ね露領と交通するものなれば、外国人の出入多く、この室の体裁も半は洋風なり。
下手横に玄関あり、入ると直ちに階子段あり二階へ通ず。また階子段の裏に出入口ありて奥の室へ通ず。真白き壁に帽子懸などあり。床の上に大いなる落葉松の鉢を置く。中央より稍下手に寄りて、真白き壁ありて左右に隔つ。入口の扉あり。
上手の一室。正面に大なる窓二個、硝子越しに、鉛の如く重く沈みたる海の色見ゆ。室の中央に、他の物とは不調和なる程荘厳に見ゆる、大卓子一個横はる。青く塗りて、鳥または獣を彫刻せり。粗造の椅子五個これを囲む。窓の傍に白き布を覆へる寝台あり。上手斜めに真白き壁、大なる窓一個、海に向ひて開く。
大卓子より稍上手に円形の暖炉ありて、火熾んに燃ゆ。その傍に石炭の箱無造作に置かれたり。
壁に懸けたる額の数七個。みな海の絵なり。
海鳥の悲鳴。浪の音。

（船長村田滝蔵、四十五歳、赭顔にして黒き髭あり。茶色の背広、椅子に凭りて新聞を読みゐる。快活なる動作、折々唄を歌ひつつ足拍子を取るが癖。声太きは海に住む子の習慣なるべし。
水夫長高野朔郎、二十七歳、逞ましき骨格に黒き背広の服を纏ふ。稍沈鬱なる顔付。同じく卓子を繞りて椅子に凭る）

水夫長　ああまだ中々暖かくなりさうも無いなあ。こ

の寒さは実に堪らん。

船　長　併し今年はまだ好いよ。去年の冬と来ちやあ酷かつたからなあ。

水夫長　ええ、随分北極に近い島でしたからな。

船　長　あの島の雪は青白く光つてゐたぜ。さうして暴風の晩などは、舷燈の辺に鳥の死骸が一面ぢや。

水夫長　思ひ出しても顫へますよ。実に寒かつた。鳥ばかりぢや無い、人間も死にさうでした。

船　長　如何だい。もう密猟は懲々だらう。

水夫長　なあに又遣りますよ。（暖炉を顧みる）おや、何時の間にか消え懸つて来た。

船　長　盛んに燃やせよ。去年の分まで暖まるんだ。

水夫長　吝嗇な宿屋だなあ。これぱかりの石炭ぢやあ、仕方がありやあしない。（暖炉のなかに石炭を投げ込む）

船　長　（窓より海の方を眺む）やあ、天気が大分怪しくなつて来たぞ。又雪でも降るんだらう。

水夫長　（同じく海を眺む）燈台の傍の信号標に、赤球が上りましたぜ。

船　長　どれどれ、うむ、先刻は見えなかつたが。（間）今夜暴れるぞ。

水夫長　何だか常とは違つた暴風のやうに思はれますな。あの赤球も厭な色をしてゐやがらあ。

船　長　何しろ心持の悪い日だ。酒でも飲まうぢやないか。

水夫長　飲みませう。

（水夫長階子段の裏の口より去る。船長黙然として海を眺む。寂寞。ややありて水夫長酒の壜乾豚の皿など持ちて出づ）

水夫長　船長。何も有りませんよ。乾豚ばかりだ。

船　長　何でも好いさ。酒さへありやあ沢山だ。（酒杯に酒を注ぐ）五郎はまだ寝とるのか。

水夫長　ええ。昨夜三時頃迄蠟燭を点けて、何か遣つて居ましたが、今日は飯も食はずに眠つてゐます。

船　長　何をしてゐたんだい、昨夜遅くまで。

水夫長　娘の許へ遣る手紙を書いてゐた様子でしたよ。

船　長　左様か。今に起きて来るだらう。（二三杯続け様に酒を飲む）

水夫長　（手の酒杯も忘れて外を眺む）何処の港でも厭なものだが、此処の赤球の色は実に堪りませんな。まるで血のやうだ。

船　長　それはさうと、己達の船は彼処で好いかな。

水夫長　大丈夫。請合ひますよ。どんな大暴風が来たつて平気でさあ。

船　長　併し今夜は余程猛烈に吹くらしいぜ。

水夫長　五郎が乗つてゐりや安心ですがね。

船　長　五郎を遣るのは可哀相ぢや。（間）だがよく寝る奴だなあ。（衣兜より大形の銀時計を出す）最早二時過ぎとるのに、如何したのだらう。身体でも悪いのぢやないかね。

水夫長　左様ぢや無いでせう。昨夜遅くまで起きてゐたので疲れたのですよ。

船　長　うむ、左様だらう。（大卓子の端に置きたる一封の手紙に目を注ぐ）おい、これは何時来たのだい。

水夫長　何です。五郎へ来た手紙ですな。（手紙を手に取りて見る）何だ、触つたら冷たかつたぜ。（間）一体何時来たんでせうな。

船　長　変だな。此処に置いてあるのを少しも知らなかつた。急な用事かも知れんから五郎を起して来ると好い。

水夫長　左様ですな。

（水夫長階子段を昇りて二階にゆく。）

灰色の鳥一羽、窓の近くを飛ぶ）

船　長　おや、妙な鳥が飛んでゐるぜ。何て鳥だらう。見た事の無い鳥だな。（窓を開きて鳥を追ふ）中々遁げぬわい。

（鳥飛び去る。

階上より荒川五郎、五十八歳、大なる骨組、色褪せたる鼠色の背広を着、同じ色の洋袴を穿つ。頭髪殆んど白く、口髭銀の如くに美し。沈みたる顔色、海風に晒されて黒くなりたる上に、稍蒼味を

『午後三時』表紙　岡田三郎助

帯びたり。額の皺深く、眼の光鋭し。黙然として人を凝視するが癖なり。衣兜に両手を入れて降り来る。

水夫長はやや後れて出づ)

水夫長　(階子段の半にて)今日は一日寝てゐましたな。

五　郎　(慵げに頭を振る)いいえ。寝やしません。中々寝られやしません。

(階下に来る)

船　長　如何した、五郎。よく眠るぢやないか。(手紙を取上げて五郎の前に差出す)こんな手紙が来てゐるぜ。

(五郎黙然として手紙を見る)

船　長　何時来たのか、少しも知らぬ間に、此処に置いてあつたのだ。

(五郎手紙を凝視して戦慄す)

五　郎　(微かに)私に手紙ですか。何処から来たのかな。(手紙を受取りて其儘衣兜のなかに入る)やあ、酒があるな。一杯頂戴しよう。眠気覚しぢや。(椅子に凭る)

(暖炉の火消えんとす。水夫長石炭を投げ入る)

船　長　如何したんだ。酷く疲れてゐるやうだな。

五　郎　(微笑)いいえ。もうすつかり疲労も取れました。何せい、昨夜は遅くまで眠られませんでな。娘の許へ手紙を書いて黎明前まで起きてゐました。

船　長　併し折角楽しみにして来たのに、家が焼けて了つてゐたので落胆したらう。

五　郎　なあに家位何でもありません。私は親も無ければ妻も無い男だから、私には船が家で、海が妻ぢや。(急に悲しげに)なあに家位何でもありません。

船　長　それも左様だな。

(此時灰色の服に半外套を纏ひたる水夫一人忙しげに入り来る)

水　夫　船長。如何も彼処に碇泊してゐては危いさうです。燈台から注意をしてまゐりました。

船　長　(暫時考へたる後水夫長に)君一寸往つて呉れんか。もう少し奥へ入れるだけだ。なあに燈台の看守の奴狼狽いてゐやがるんだよ。

水夫長　よろしい。一寸往つて来ませう。

(水夫長立上る)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五郎　君一寸待つて呉れ。船へ行つたらな、私の机の抽斗から短銃を持つて来て下さらんか。

船長　短銃を如何するんだ。

五郎　あんまり海へばかり出てをつたので鏽びましたから、磨かせやうと思つてゐるのです。（水夫長に）ぢやあ頼むよ。

（水夫長水夫と共に去る）

五郎　（外の方を眺む）成程、大分怪しい空模様ぢや。何だか人を圧し付けるやうな雲ですな。

船長　実に厭な雲の色だね。それに五郎、あの赤球を見ろ。鉛色の空から赤い血が一滴垂れたやうだぜ。

五郎　左様ですな。何だか気味が悪い。妙な寒さだと思つたら、何だか降つて来さうですな。（嘲ける如く笑ふ）暴れるならいくらでも暴れるが好いわ。

船長　暴風の前は心持の悪いものだね。

五郎　なあに好い心持でさあ。（寝台の方へゆき腰を懸けて衣兜より手紙を出す）船長。今夜久しぶりで騒ぎませうか。

船長　中々元気ぢやねえ。

五郎　（封を切る）函館ぢやあ愉快でしたなあ。（眼を手紙の文字に走らせつつ）今夜又あんな騒をやりませうよ。（暫時沈黙）馬鹿な事を書いてゐるわ。

船長　何だ。

五郎　（立上りて椅子の所へ来る）何ですかなあ。まあ云ひますまいよ。（衣兜より時計を出す）二時少し過ぎか。

船長　今日は殆んど一日寝とつたね。

五郎　まだ眠つてから眼を覚ます事が出来れば好いです。だがね船長、今日騒ぐのは止めませうよ。別段秘密ぢやない。これを御覧なさい。（手紙の一部を示す）午後三時にお迎ひに上るべく候と書いてあるでせう。私は此手紙を出した者に会はなくてはならん。

船長　では止さうよ。

五郎　（安からぬ有様にて彼方此方に歩む）午後三時。午後三時。

（外には霙の音が微かに聴ゆ）

船長　寒い、寒い。おや、暖炉の火も消え懸つて来た。（石炭を無造作に抛り込む）

五郎（猶歩みつつ）黒い帆を張つた船で来るのか。馬鹿な奴だ。

船長　中々燃え付きさうも無いな。

五郎　午後三時。最早直きぢや。午後三時にお迎ひに上るべく候。（猶彼方此方に歩む）

船長　うん。やつと燃え付いた。

五郎　ふうん。矢張り黒い帆の船で来るのか。七日も続けて黒い帆を張つた船の夢を見たから、大抵この位の事だらうと思つてゐた。

船長　何だ。何を云つてゐるのだ。（外の方を見る）おや、霙が降り出したね。

五郎　（椅子に戻る）ああ、到頭降り出して来ましたな。

船長　如何したんだ。大分顔色が悪くなつたぜ。

五郎　左様ですかな。（頭を振る）本当の私はあなたには分らんな。唯一人この手紙を送つた者が知つて居るばかりだ。

船長　本当の貴様だと。（間）何だか謎のやうでよく分らんねえ。

五郎　分らんで好いのです。分つたらあなたは驚くよ。（声を低く）私はね、船長。海の中から生れた男なんですよ。私には本当の父も母も無い。（海の方を指さす）彼処が私の産屋ぢや。（間）さうして彼処が私の墓場ぢや。今迄幾度も海へ帰らうと思つた。

船長　海へ帰らうと思つたのか。

五郎　左様です。左様です。今なら喜んで帰りますが、今迄は少し躊躇した。（戦慄す）船長、私は七日続けて夢を見ましたよ。昨日の晩も見ました。一昨日の晩も見ました。其前の晩も、其前の晩も、丁度七日続けて同じ夢を見ました。

船長　どんな夢だ。

五郎　怖しい夢です。実に怖しい夢です。併し此怖しさはあなたには分らない。（急に高く笑ふ）捕鯨船の砲手で荒川五郎と云へば、かなり売れた名前だが、もう老い込んで了ひましたよ。

船長　いや。まだ中々壮んだよ。

五郎　もう駄目です。昨日鏡に向つて、つくづく自分の顔を眺めました。此皺の寄つた事は如何です。凝つと見てゐると、まだ微かに残つて居る額際の傷痕から、新たに血が流れ出すやうな気がして、竦つとして鏡を抛り出しました。貴方

も覚えてゐませう。もう十六七年前に私が決闘した事を。あの時の傷です。

船長　うん。左様だつたね。よく覚えてゐるよ。相手は何とか云つたな、彼奴は二三日してから死んで了つたつけ。

五郎　可哀相な事をしましたよ。（黙考す）併し彼奴も幸福だ。

（五郎の娘ふゆ、二十一歳。粗末なる着物、古き肩掛を纏ふ。色白く、肉豊かなれども、額の辺何となく悲しげなり。常に稍俯向きて面を上げず。弟進、十一歳。年より幼く見ゆ。鼻高く、眉黒き子、両眼盲ひたり。二人玄関に来る）

娘　御免なさいまし。

船長　誰か来たやうだぜ。

五郎　（起上りて玄関の方へ来る）やあ来たか。さあ入れ。

（ふゆ、進、此方の室に来る）

娘　もつと早くと思つて居たのですが、つい遅くなりました。

五郎　なあに遅い事は無いわ。（時計を見る）まだ三時までには三四十分ある。

進　（突然）お父様。今日は寒いねえ。

五郎　寒いか。この位の寒さに弱つちゃ駄目だぞ。（手を取りて暖炉に近き椅子に懸さす）もう直きに暖かになるわ。

娘　（五郎の顔を凝視す）お父様。何だか顔色がお悪いやうですねえ。

五郎　そんな事はありやあせん。

娘　いいえ。何時もより蒼ざめて、眼が潤んでおいでですわ。

五郎　左様かな。大方寒さのせゐだらう。何も心配する事は無い。（沈みたる調子）ふゆ。併し己は今お前の顔を見て変な心持がしたよ。

娘　どんなお心持なんです。

五郎　いや云ふまい。口では云ふ事の出来ない怖しい心持ぢや。

娘　変だわねえ。お父様、本当にあなたのお顔色がお悪いやうですよ。何だか顫へていらつしやるぢやありませんか。

五郎　（頭を振る）いや何でもない。（間）それはさうと、お前はよく己の手紙を読んだらうな。

娘　はあ。よく読みました。

五郎　左様か。書いた事はすつかり分つたらうな。
娘　はあ。よく分りました。
五郎　進。お前も子供だが分つたらう。
進　ええ。僕はよく分つてゐます。
五郎　左様だらう、左様だらう。（急に神経的に）ふゆ。お前にはまだ分らんな。
娘　分つてをりますよ。ですからそのお話は。
船長　五郎。久しぶりで会つたんだ。何か面白い話でもしろよ。
五郎　左様ですな。
進　僕は帰りたい。姉さん、帰りませう。
五郎　何んだ。何故帰るのだ。
進　何故でも。
娘　如何したんです。
船長　何んだ。今に面白い事をして遊ぶから、そんなに帰りたがらなくても好いぢやないか。
五郎　（悲しげに進を見る）待つとれ。待つとれ。まだ早い。
進　だつて僕は何だか怖い。
五郎　（愕然として）何だ怖いと云ふのか。そんな事があるものか。
娘　もつとゐたつて好いでせう。
進　帰りたいがなあ。
五郎　進。それに今夜は暴風だぜ。（外を眺む）うん、霙は最早止んで了つたやうだ。
船長　止んだかね。併しあの雲の模様ぢやあ、もう直き暴風がやつて来るね。
娘　気味の悪い空ですこと。おや、赤い球が上つてをりますね。
五郎　うん。暴風の報知ぢや。
娘　では愈今夜暴風が来るのですかねえ。
船長　なあに。一晩暴れりやあ後は好い天気になりまさあ。
娘　併し怖いわねえ。
五郎　（聞咎む）何だ。怖い。
進　（突然）姉さん、やつぱり帰らうよ。
娘　何故そんな事を云ふの。今帰つて途中で暴風に会つたら大変ぢやありませんか。
進　好いから帰らうよ。
五郎　進。お前は己が怖いのだらう。このお父様が怖いのだらう。
進　（答へずして姉に）帰らうよ。

五郎　（苦しげなる顔付）如何だ。左様だらう。
お父様が怖いのだらう。
娘　お父様。今日は如何なすつたんです。そんなにおつしやると進が泣きますよ。
進　早く帰らうよ。姉さん。
娘　如何してそんなに帰りたがるの。もう一時間待つていらつしやいね。
進　きつと一時間経つたら帰るね。
娘　ええ。きつと帰るわ。
船長　大変帰りたがつてゐるな。如何したんだい。
五郎　（投げるが如く）如何したんですか。
（遠く海上より汽笛の響聴え来る）
五郎　今頃船が入つて来たのかな。
船長　空模様が怪しいので、遁げ込んで来たのだらう。（窓より海の方を眺む）己たちの船も奥の方へ入れたらうな。
五郎　此処から見えますか。
船長　いや。見えん、見えん。二階からは見えるだらう。
五郎　見えます。燈台が丁度真正面ぢや。
船長　左様か。それでは一寸見て来よう。
（船長階子段を昇りて二階にゆく。
汽笛の響二度幽かに聴え来る。暫時沈黙。浪の音。
海鳥の悲鳴）
五郎　ふゆ。お前は俺の手紙に書いてあつた事がよく分つてゐると云うたな。
娘　分つてをりますよ。此処にお手紙を持つてをります。（帯の間より手紙を出す）
五郎　よし。一寸お見せ。（手紙を受取り厳かなる顔付にて読む）黒き帆の船が見える筈なれば其船に乗りて二度（ふたたび）海に帰るべく候。（娘に）此文句が分つたか。
娘　今迄の船をお止めになつて、別の船にお乗りになるのでせう。
五郎　（二度読む）これ或は永久の離別なるやも知れず候。此文句も分るまい。
娘　分つてをりますよ。
五郎　分るものか。（二度）分るものか。
娘　お父様。今日は如何なすつたのです。
五郎　如何もしやせんよ。怖ろしき夢に候。実に怖ろしき夢に候。併も七日の間続けて見申し候。これもお前には分るまい。

娘　お父様。もう。

五郎　（猶手紙を読み続く）書き終りし時、蠟燭は流れ尽して、何となく悲しく思はれ候。ふゆ、分るか。

娘　分つてをりますよ。

五郎　嘘を云ふな。此恐怖と苦痛とは己の外は誰にも分らんのぢや。（間）ええ。こんな手紙は焼いて了へ。（手紙を暖炉のなかに投げ入る）

進　お父様、如何したんです。

五郎　黙つとれ。姉さんに分らん事がお前に分るか。

進　何です。姉さんが泣いてゐるぢやありませんか。

五郎　棄つとけ、棄つとけ。（不安の様にて椅子を離れて彼方此方に歩む）午後三時。午後三時。

進　お父様、最早三時ですか。

五郎　（驚愕）いや、まだぢや。併しもう直きだよ。

進　（急に思ひ出したる如く）姉さん帰らう。

娘　まだ一時間経ちやしませんよ。もう少しお待ちよ。

五郎　待つて居ろ。進。

進　僕は何だか怖いんです。誰だか冷たい手が触るやうですもの。

五郎　（立留る）進。何だ。

進　頸の所へ冷たい手が触るんです。

五郎　冷たい手が。

進　窓が開いてゐやしないのですか。

娘　開いてゐやしませんがね。

五郎　（冷かに）何処か戸の隙間から風が来るのだらう。

進　左様かなあ。

五郎　左様だよ、きつと。（わざと高く笑ふ）進。何だかつまらなさうだな。お父様が面白い話を聞かせやうか。御伽噺ぢや。（進の傍の椅子に腰を下す）

進　どんな話。面白いんですか。

五郎　うん。面白い話だ。往昔北の海の遠くの方に死の島といふ島があつたのぢや。

進　今は無いの。

五郎　黙つて聞くんだ。其死の島と云ふ所には、夜ばかりで昼が無い。冬ばかりで春も夏も秋も無い。唯青い色の島が、星の薄明りでぼんやり見える。蝙蝠見たやうな鳥と栗鼠見たやうな獣が栖んでゐるばかりで、外には何の鳥も獣も栖ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com